

慶應義塾大学ビジネス・スクール
2005年度 秋学期「ケースメソッド教授法」

コア・セッション「ケースメソッド・ティーチング・スキル」(第1～5会合)
オプション・セッション「ケースメソッド教育の導入とコース開発」(第6～7会合)

授業シラバス

教授 高木晴夫

筑波大学大学研究センター客員研究員、ケースメソッド教育研究所代表 竹内伸一

1. 概要

本科目の参加者が目指すゴールは、ケースメソッド教育を「知り」「分かり」「実践し」「別の場所で再現する」ことができるようになることである。具体的には、ケースメソッド授業の特徴である双方向性、創発性、協働性、内省促進性を十分に引き出し、学習者の実践力を育むための、教材選択、授業設計、授業運営、ふりかえりが適切に行えるようになること、また、それに加えて、この授業方法による授業コースを設計・導入できるようになることが求められている。これらのゴールを目指すために、本科目は「コア・セッション」と「オプション・セッション」という連続したふたつのセッションで構成される。

今年度が開講される本科目は、大学院博士課程・修士課程併設科目(自由科目)の履修生と、学外からの聴講生(科目等履修生)でクラスを構成する。本シラバスでは、これ以降、便宜的に前者を「学内履修者」、後者を「学外履修者」と呼び分ける。

コア・セッションは「ケースメソッド・ティーチング・スキル」と題し、全5会合を使って、ケースメソッドによるディスカッション授業の準備・運営の基礎スキルを身につけていく。上述したゴールのうちの「知る」「分かる」「実践する」に該当する。学内履修者はコア・セッションに出席し、所定の成績を収めれば、慶應義塾大学経営管理研究科の自由科目「ケースメソッド教授法」の単位を取得できる。したがって、オプション・セッションを履修しなくてもよい。同様に学外履修者もコア・セッションのみを履修できる。

コア・セッションに続くオプション・セッションは、「ケースメソッド教育の導入とコース開発」というテーマで行う。コア・セッションでケースメソッドによるディスカッション授業の準備・運営の基礎スキルを学んだ履修者が、自らが教える授業にケースメソッド授業法を取り入れようとする場面や、ケースメソッド授業のコマをいくつか組み合わせて授業コースを作る場面で、必要になるであろう考え方や注意点について、全2会合を使って扱う。このセッションのゴールは、前述したうちの「別の場所で再現する」である。

本科目では、コア・セッション全5会合を第1～第5会合、オプション・セッションの全2会合を第6～第7会合というように、通し番号で呼ぶことにしている。

学内履修者は、もし希望するならば、コア・セッション(第1会合～第5会合)を履修後、その後に続くオプション・セッション(第6会合～第7会合)にも参加できる。この場合、追加の2会合分は単位にはならない。学外履修者も同様に、コア・セッションに続けてオプション・セッションを履修できる。

ここで注意して欲しいのは、学内履修者も学外履修者も、コア・セッションを履修せずにオプション・セッションだけを履修することはできないことである。オプション・セッションのみの履修を希望する方は、本シラバスの末尾に記載した問い合わせ先まで個別に相談されたい。

コア・セッションの修了者全員に、慶応義塾大学ビジネス・スクールによる「ケースメソッド教授法・単位取得証明書」が発行される。ただし、発行には本人の申請が必要である。

2. 授業で重視する価値観と目的

慶應義塾の鳥居泰彦前塾長はケースメソッドによる討論形式の授業の重要性について次のように述べている。「教育は受け身であってはなりません。学生は自ら学ぶのであって、教育は自分でするものです。自ら積極的な意思を持って、自らの個性を見だし、確立し、自分に一番必要な生き方を見定めていく作業が必要になります。これは他人まかせの受け身ではできません。だから、教育は自分でするものです。では、自分で学ばねばならない学生に向けて、教師は何をすべきでしょうか。学者として研鑽した知識を学生に授けることは重要です。しかしそれだけで教師として真になすべきことのすべてをしたことにはなりません。講義した知識が、学生の主体性と積極性によって彼らの叡智となるようにすることこそ、本来のものであります。ケースメソッドによる討論形式の授業は、これを目指しています。ケースメソッドでは、教師も学生も『学びの共同体』をつくるのであり、自

ら考え、責任ある発言をし、討論することで単なる知識を高度な叡智として獲得しようとしてします。」

本科目では、教師として「真になすべきこと」を遂行するために必要な授業方法とその導入技術の獲得、ならびにその向上を第一目的としている。

また、本科目ではその先にある目的も見据えていく。それは、ビジネス・スクールの特論科目としての本科目を通して、参加者がディスカッションの場面でリーダーシップを発揮することの重要性を理解することである。このような理解が、営利・非営利組織におけるリーダーシップ開発の一助となることを、本科目の第二の目的としている。

3．本科目の特徴

本科目の特徴は、ディスカッション授業運営の「場数を踏む」ための機会を最大限に設けていることである。

幸いにして本科目には、例年、ケースメソッドによるディスカッション授業の運営スキルを身につけたいと願う履修者が、学内外から数多く集ってくれる。履修者はときに自らがディスカッションリーダーとなり、練習相手を務めてくれる仲間によって磨かれていく。

特に、実働しているディスカッション授業に接する機会の少ない学外者にとっては、ケースメソッドで学んできた慶応義塾大学ビジネス・スクールMBA課程の現役学生とともに、ディスカッションリードの練習ができる場を得ることが有益であろう。

本科目は志を同じくした履修者たちが同じ場所に集うからこそ成立する。この教室で実践知としてのディスカッションリード技術を積み上げ、同時にその習得を支えるための知識を向上させながら、ディスカッションリーダーとしての姿勢・態度を育むことを目指す。

4．授業の内容構成

本科目の中心には「ディスカッションリード演習」が置かれる。これを繰り返すことにより、ケースメソッドによる授業運営に必要な実践知と身体能力が獲得される。また、この中核的訓練を支えるために、ケースメソッド教育に関する理論知識や周辺知識を整理する「レクチャー」の時間も毎会合設ける。また、「ビデオ&スタディ」と呼ぶセッションでは、ディスカッションリードのケーススタディ映像から学ぶトレーニングを行う。

このように多様なプログラムを織り交ぜながら、授業運営スキルの高まりに合わせて、参加者間で議論しておくべきイシューについて、順次議論していく場が用意されている。

毎回の授業進行の基本パターンと時間配分はおおむね次のとおり。ただし、いくつかの会合では変則スケジュールで運営される。

10:30～11:30	レクチャー
11:30～13:15	ディスカッションリード演習(AMの部)
13:15～14:15	昼休み
14:15～16:00	ディスカッションリード演習(PMの部)
16:00～16:30	ビデオ&スタディ
16:30～17:00	フィードバック、Q&A

5. 履修対象者

本科目の履修対象者として、提供側が想定している履修者像は次の通りである。

第一に、経営教育をケースメソッドで行うための準備が必要な人である。慶應義塾大学ビジネス・スクールではケースメソッドを授業方法の中核に据えているため、博士課程修了者が教壇に立つ場合、ごく自然にケースメソッドで教えることが期待される。

第二に、慶應義塾大学ビジネス・スクールのMBA課程をケースメソッドで学び、卒業後にその学びのメカニズムを企業等で再現したいと考える人である。本科目で扱う内容は、直接的には教育研修場面での活用性に富むだろうが、ディスカッションリードのスキルとは、多様な人材を束ねて彼らの自律性を引き出すべきビジネスリーダーとしての資質と共通する。本科目では、授業の内容をリーダーシップに転用する文脈を重視している。

第三に、大学等の教育機関で教える教師、およびセミナー等で教える講師である。学外で教育活動に尽力されている方々の履修を心から歓迎する。本科目ではケースメソッド授業が進行する状況を題材とした教材ばかり扱うので、履修者の専門領域が問題になることはない。

第四に、ケースメソッドで教える教育を企画・推進・維持する立場にいる人である。ケースメソッド授業で可能になる学びと、その作動の原理、水先案内人となるディスカッションリーダーの育成プロセス、そしてコース開発のポイントのいくつかが、本科目により

概観できるだろう。その意味では、教育ビジネス従事者のみならず、あらゆる経営組織のリーダー、人事教育担当者に履修していただくことが可能である。

7. 日程と授業内容

コア・セッション「ケースメソッド・ティーチング・スキル」 第1・5会合

第1会合 10月1日(土) 10:30 - 17:00

- レクチャー&ディスカッション : ケ - スメソッドを理解する
- ディスカッション授業デモ : ケース「高倉銀行蒲田支店」(竹内) 以降(内)は運営者
- ビデオ&スタディ : ディスカッションをスタートさせる・終わらせる
- ミーティング : ディスカッションリード演習者を決定する
- 教科書・事前リーディング箇所 : P1 ~ P29

第2会合 10月15日(土) 10:30 - 17:00

- レクチャー&ディスカッション : 討議から学ぶことの価値を考える
- ディスカッションリード演習 : ケース「嘔み砕いて教えてもらえるのも魅力です」(参加者による運営)
: ケース「今日の授業に失望しています!」(参加者による運営)
- ビデオ&スタディ : 理想的なディスカッションの状態を理解する
- 教科書・事前リーディング箇所 : P33 ~ P57

第3会合 10月29日(土) 10:30 - 17:00

- レクチャー&ディスカッション : 参加者を理解する
- ディスカッションリード演習 : ケース「日本人留学生 田中功一」(参加者による運営)
: ケース「クラス発言の裏事情」(参加者による運営)
- ビデオ&スタディ : ディスカッション授業における反面教師
- 教科書・事前リーディング箇所 : P58 ~ P73

第4会合 11月12日(土) 10:30 - 17:00

- レクチャー&ディスカッション : 学びの共同体を築く
- ディスカッションリード演習 : ケース「あの人が話し出すと授業が止まる」(参加者による運営)
- ディスカッション授業デモ : ケース「ベンチャー電子工業株式会社」(高木)
- ビデオ&スタディ : 挙手と発言を適切に扱う
- 教科書・事前リーディング箇所 : P74 ~ P93

第5会合 11月26日(土) 10:30 - 17:00

レクチャー&ディスカッション : 非指示的に教える

ディスカッションリード演習 : ケース「この授業は難しすぎます」(参加者による運営)

: ケース 未定(授業運営者が選択できる)(参加者による運営)

ビデオ&スタディ : クラスを学びの共同体に向かわせるために討議に介入する

教科書・事前リーディング箇所 : P642~P659

オプション・セッション「ケースメソッド教育の導入とコース開発」 第6・7会合

第6会合 12月10日(土) 10:30 - 17:00

レクチャー&ディスカッション : ケースメソッド教育をインストールする

ディスカッションリード演習 : ケース「ケースメソッドによる社内教育へのチャレンジ」(参加者による運営)

レクチャー&ディスカッション : ディスカッション授業におけるクラスの成長と教材の流列

パネルディスカッション : ケース教材の作成

教科書・事前リーディング箇所 : P621~P641

第7会合 12月17日(土) 10:30 - 17:00

レクチャー&ディスカッション : 教育機関が犯しやすい「不手際」を考える

ケースディスカッション : ケース「学校の声が聞こえてこない」(竹内)

レクチャー&ディスカッション : シラバスに「もてなしのこころ」を込める

ケーススタディ : このシラバスの「よいところ」「不十分なところ」(高木)

8. 授業が行われる場所

慶應義塾大学大学院経営管理研究科

教室棟 11番教室

交通: 東急東横線日吉駅下車徒歩10分

(神奈川県横浜市日吉本町)

キャンパス地図 URL: <http://www.kbs.keio.ac.jp/school/campus.html>

9. 教科書、および使用する教材のリスト

教科書：「ケースメソッド実践原理」

L. B. バーンズ他著，高木晴夫訳，ダイヤモンド社，1997

一般書店から注文できるので、参加者各自で書店よりお求め下さい。

この教科書について

約 680 ページからなるこの教科書は 3 部構成になっていて、第 1 部と第 2 部がいわゆる教科書的な記述であり、第 3 部がケース集・リーディング集になっている。授業に参加するための事前リーディング箇所には、第 1 部と第 2 部だけを指定した。しかし、この教科書の本質的なよさは量・質ともに豊かな第 3 部にあり、それが「ケースメソッド授業法をケースメソッドで学ぶ」という本書のコンセプトを支えている。とくにリーディングは示唆に富む読み物になっているので、時間の許す限り目を通していただきたい。

使用教材（別配布ケース・資料等）

< 第 1 会合 >

リーディング「ケースメソッドによる経営能力の育成」

リーディング「理論知識と実践知識」

ハンドアウト「ソクラテスメソッド」

リーディング「ケースメソッドによる討論授業 - 価値観とスキル - 」

リーディング「ケースメソッド授業での討論の振り付け」

リーディング「初めてディスカッションリードを行う教師の胸中」

ケース「高倉銀行蒲田支店」

リーディング「続・ケースメソッドによる経営能力の育成」(当日配布)

< 第 2 会合 >

リーディング「気づいてみたら身につけていたもの」

リーディング「議論を通して得た仲間」

ケース「噛み砕いて教えてもらえるのも魅力です」

ケース「今日の授業に失望しています！新任講師田中恵(A)」

< 第 3 会合 >

リーディング「ゼネラルマネジメント養成とケースメソッド」

リーディング「ディスカッション授業参加者の期待と不安」

ケース「日本人留学生 田中功一」

ケース「クラス発言の裏事情」

< 第4会合 >

リーディング「ケースメソッド講師になること」
ケース「どんなギャップが出てくるのか楽しみです」(当日配布)
ケース「あの人が話し出すと授業が止まる」
ケース「ベンチャー電子工業株式会社」

< 第5会合 >

リーディング「ブレヒトの教育劇」
リーディング「非指示的に教えるということ」
ケース「この授業は難しすぎます」
ケース 未定(参加者が選択)

< 第6会合 >

ケース「ケースメソッドによる社内教育へのチャレンジ」
シラバスサンプルA
シラバスサンプルB

< 第7会合 >

ケース「学校の声が聞こえてこない」
リーディング「亭主と客人」(当日配布)
シラバスサンプルA
シラバスサンプルC

< 第1会合～第5会合共通・ビデオ&スタディ用教材 >

ケース「住友電気工業株式会社(C)」

これらの教材のうち、事前配布分(当日配布の印がないもの)については、学内履修者にはメールボックスに配付し、学外履修者には郵送する。当日配布分は授業中に配布する。授業を休んだ場合は、次の会合に出席したときに講師から手渡す。

10. 必要な準備とワークロード

7項の授業内容にある「ディスカッションリード演習」について必要になる事前準備は、ディスカッションリードを行う講師役と、講師役のディスカッションリードにより議論をする参加者役とで異なる。

第1回会合の最後に、以後のディスカッションリード演習8回分のディスカッションリーダー（講師役）8名を決める。ディスカッションリーダーになった者は指定されたケースにつき、授業で討議する設問を作成して、十分の余裕日数を持って他の参加者に知らせる。このために活用する電子メールアドレスのリストを第1会合で作成する。

ディスカッションリーダーを担当することになった者は、その設問を作成した意図、その設問を使ってケースを討議することのねらい、討議をすることでどのような学びをクラスに形成しようとするのか、「ディスカッションリード演習」のクラス討議時間をどのように使うか、などを授業準備ノートとして作成する。

また、受講者役として討議に参加する者は、講師役から事前に与えられた設問をもとにケースを読み、クラス討議で自分が発言する内容を授業準備ノートとして準備する。授業準備ノートは手書きのラフなものでかまわない。分量的にはA4・1枚程度でよい。これに、日付、ケース名、氏名を明記して、各回の授業終了時に教室で提出する。なお、第1・第4・第7会合では、参加者による「ディスカッションリード演習」ではないディスカッションが行われるが、授業準備ノートは同様に提出すること。

これに加えて、毎会合のリーディング・アサイメントとして、教科書の指定された箇所を一読しておくことが必要である。

11. 成績（学内履修者のみ）

成績は次の2つの部分より構成する。第1の部分は、第1～5会合で行う「ディスカッションリード演習」（第1・第4会合はディスカッション授業デモ）に参加するための準備ノートの提出による。授業準備ノートは10項に説明した通り。全9ケース分が提出されていれば成績として「B」を保証する。

成績を構成する第2の部分は、希望するならば、期末レポートの意味合いで「ケース」を書いて提出する。具体的には、教科書に掲載されているような種類の授業の様子を描いたケースを作成する。受講生が、講師あるいは受講生として、実際に経験した授業の様子でよい。ケースを書くにあたっては、教科書第 部にある「自分のためにケースを作成する」（P.621）が参考になる。期末レポートとしてケースが提出された場合には第1の部分の成績に必ず上積みされる。提出場所はKBS事務室。提出期限は12月9日（金）

の事務室執務時間内。当日必着の郵送でもよい。到着の確実性が維持できないので電子メールでの提出は認めない。

このケースは次年度以降の授業で活用することを目指し、同時にそれを蓄積することで日本版の「ケースメソッド実践原理」を出版することを目指す。

12. このコースに関する問い合わせ先

コースの内容に関する問い合わせ、履修上の相談：

竹内伸一 e-mail：shinichitakeuchi@casemethod.jp

学外履修者の履修手続きに関する問い合わせ：

慶應義塾大学大学院経営管理研究科事務室 学事担当

TEL：045-564-2441（ダイヤルイン）FAX：045-562-3502

e-mail：gakukbs@info.keio.ac.jp

お願い

現在、慶應義塾大学では、本科目と関連するケースメソッド教授法研究プロジェクトが進行中であり、そこでは本科目を遠隔授業形式で実施するための実証研究を行っています。つきましては、本科目の授業を録画させていただき、その一部を遠隔教育用の教材として活用させていただきたく、お願い申し上げます。

また、授業内容および使用教材の詳細について変更がある場合は、このWEB上のシラバスを都度更新していきますので、定期的にウォッチしていただければ幸いです。

以上

2005/06/08 作成